春の自然の森観察会と古城址、神社めぐり行程表　4月21日(日)

文井川「白羽山はばたきの森」に集う会
実行委員　河村喜弘・山内　誠・山内まゆみ・小澤節子

樹木名　（波摩都豆羅に出てくる）

そよの木 = そよご

猿すべり = ひめしゃら

油樟 = 犬桜？ 梢の上に雪の様な花.
ハクウンボク. サワフタギ　アオダモ

欄（あららぎ）= いちい・おんこ

榛（けやき）

楓（かえで）

椹（さわら）

栂（つが）

楢（ぶな）

唐桧（とうひ）

海棠（かいどう）= ズミ？（ミツバカイドウ）

草

深山茱萸（みやまおおばこ）
=
バイケイソウ

ウワミズザクラ・タンナサワフタギ

ミズナラ　・クマシデ

ダンコウバイ・ミヤマザクラ

アブラチャン・コシアブラ.

文化9年弥生14日（西暦1812年5月1日）島田～梅地～島田へ

20日　（1812年5月6日）第7日目 小長井～洗沢へ

太兵衛宅に暇して、化成院の左の方より山路に分け入る。洗沢迄は7・80町ほどの道程で人家は一戸も無いという。『彼の白浪に出会ったらどうしよう』と心配しながら登るに、大日の杉の木の下で休みをとっていると、下の方から人の声がするので見ると、17・8の女子を頭に姉妹三人が菰苞を背負い登って来る。「皆さん、どこへ行くのですか？」と問うと「あがらみ（私達）は小長井の者で、小楢安の焼畑へ行くだよー」と答えた。「その場所は洗沢へ行く途中ですか？」と聞くと、「そうだよー」と言う。「山中は淋しいから、いっしょにつれていって下さい」とたのみ、後になり、先になり登って行くに、幼い女子達ではあるが、心強く、木曽の巴女と登っているようで可笑しい。

ぞうじ場付近の清い小滝の水を飲もうとすると「この水は呑んではいけない」と言う。太刀洗水といって人を切り、血の付いた刀を洗った水で、飲むと病気になるという。やっとのことで登ると峠である。河内川の上流藍沢の水は、乾いた咽喉を潤してくれる。そこへ20歳ばかりの男子が荷を負い登って来た。娘達の兄だという。皆んなで登って行くと、眞地の橋についた。左の方に平栗へ上る細道がある。

道の傍に奇樹がある。（そよの木の絵参照）元木はひとかかえの大木、2丈ばかり上より枝が四方に垂下って地下に入り、根を生やしてまた元木となり枝葉を繁らせている。『これは何の木だろう。一枝取って家への土産にしてみよう』と木に近付くと、男子が「これは神木であるからいじるでない。この枝を手折ればバチが当たるで」と言う。「何の木？」と問うと、そよの木（そよご）だという。この山中に多く見られるが、この形は実にめずらしい。

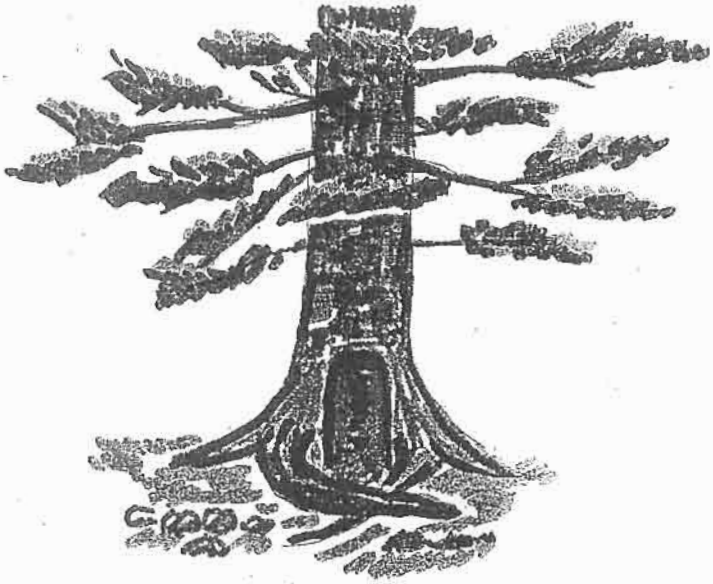
この辺、猿すべり・シデ・小楢が多い。そのほか高い梢の上に雪の様な花をつける油樺（別名犬桜）もある。道の周囲深山つつじが多いが松や柏の樹は無い。山里では朴の樹の葉で5月5日にかしわ餅を作るという。漸く山の半腹に至り、番子の峠（行人坂臥度）という所を通り、小楢安峠に至る。

この近くに日影という場所があり焼畑をしているという。いっしょに登って来た兄姉妹がここの山小屋がうちの小屋とて鹿垣を乗り越えて中に入っていった。我等も小屋に入れてもらい休けいとなる。小さな小屋なので、昼食は外で食べる。娘達も昼食をとり、口々に姦しい。山里の生活で、高山に畑を開いて黍・稷を植え、やがて秋の収穫を迎えるまで手入れをするが、特に収穫を前に禽獣（鳥や獣）に食べつくされる事が度々あり、それをふせぐために、極老や病人をのぞき、家人全員で山小屋に来て木板をならして禽獣をふせぎ、収穫物を小屋に収蔵した夜は、松火を灯し、一晩中、木板や大声を出して守るという。その苦労は大変なものだと思った。又、山中の焼畑耕作のやり方は、まず、その場所の草木を根伐り、火をかけて焼く。その灰は肥料となり育ちがよい。1年目は蕎麦、2年目は粟・稗、3年目は芋・小豆・胡麻・荏胡麻を作り、また別の畑を開くという。火田（やぶやき）は3月のはじめ頃と聞く。山中の習慣とはいえ、大変な仕事である。

にわかに雲行きが悪くなったので、いとまごいをして洗沢に向けて出発する。ここからの見晴しは、智者山、風尾山（智者権現の古宮）・遠江の国朝日ヶ岳・黒法師山・前黒法師山、又右に展じて、梅地の七峯などが見える。雨風が降ってきた中、道脇に道標があった「秋葉道右千頭・小長井。左青部堀之内」と書かれていた。その次の道標は「右宇目之奥泉、左河根道」とあった。なお行くと一軒屋があり、とち白という所であった。ここは志太・安倍の郡境である。ようやく洗沢についた。ここは藁科奥の杉尾の枝郷である。ここに一夜の宿をお願いした。主人曰く「朝日あたれる方を安倍郡とし、夕日あたれる方を志太郡と定める」が印象的。外の雨の音が心配だが、草の枕にて心よく寝る。

21日 洗沢 ～ 八草（智者山霊場参拝・雨降り）

雨が少しあるが、晴れ間も見られるので、智者山に登って権現を拝そうとて出発する。しばらくすると又大雨が降って来た。蓑笠を通し、膚へさすような強さである。やがて深林に入り、金剛力士の門に出た。ここが智者山の霊場である。老樹が立並び梢は霧がかかり森々として、低木草森、緑苔滑らかな地表がある。正面に千手薩陲の仏殿の２堂、右手の高丘に智者大権現の宮祠がある。お参りをしてから、千手の古殿に入って雨宿りをする。時刻はわからないが昼食をとり、雨にぬれた衣をまとい出発する。やがて四辻に出た。左梅地道、右洗沢道、真中の道を行き、漸く八草村に至る。ここに智者の神主の高橋志摩氏の家に一夜の宿をお願いして泊めてもらう。父子共柔和徳美に見受けられる。八草村は安倍郡に属し、藁科川の山奥で、村落は山の斜面にへばりついていて、稲は一粒も実らず、雑穀と茶畑だけである。



夜話に智者権現の勧請の年を尋ねると、「よく判らないが、祭神は天神七代、地神五代で、１つには12社権現である」と答えた。古棟札が20枚あるが、あまりに古くてよく判らない。が、古いお宮であることはまちがいない。按に総国風土記に、大野郷（上藤川・岸・田代）・大野峯（智者山）大野岡（風尾山）の地名と大化三年（647年）猿田彦命を祀る大野神社の記述があるという。

22日 八草 ～ 天狗石越え、梅地へ（途中略）

快晴にて、出発する。その時主人が話した「私の先祖に明暦中（1655～58）の頃の古墳がある。33年の年忌を弔い供養に卒都婆を立つと、根を生じて、今は大木となっている」と聞くに、そこを通ったところ、大きな栂の木に、枝葉が繋り、石碑を根の内に巻抱えている。（上の絵参照）誠に珍しい事である。

今日は梅地に行くからと気を引きしめて登り、四辻に出る。はるか東方に富士山が見えた。登りつめると、智者山の北嶺につく。林の木々は猿滑、欄（イチイ）、榉、楓、油樺、椹、栂、樅、唐檜、松、海棠などが大木をなし、深林幽暗、四方の眺望もない。倒木は苔むし、聞きつけぬ鳥が鳴き、道くろに深山茱萸（バイケイソウ）と言う毒草が多く生え心細くただただ涙を催してならない。

なお進んで行くと岩石をならべそろえた所に至った。岩に腰かけて休んでいると、男子が３人梅地の方より来た。「ここは何という場所ですか？」と聞くと「ここは天狗石橋山だでー」と言った。この所から崩野まで三里ほど、この様な石を敷き並べたあとがあるそうで、古老の伝えに『昔、天狗が集まって一夜の内に石橋を三里作った』との事。（下の写真が天狗石橋の山頂付近）

少しの間に霧が梢にかかって来た。昼食をいそいで食べて出発する。道の脇の林の中に豺狼の食べた鹿の肉のまだ温なのが落ちている。毛の入った狼の糞もある。ああ恐ろしい。足早に立ちさってなお行くと、道が二つにわかれ、左方向は谷畠、和栗へ下る。なお下ると雷木坂を通り、石地蔵のある所で休む。ここは猪の河内沢（油の河内沢のこと？）と言って深林幽谷である。

漸く山趾に下り着く。右手山の方に大瀑布がある。猪の河内川・夕豆久川と言って、両川とも七ツ峯を源としている。巨岩を縫って流れる両川は『龍が蟠るが如く、虎が踞るに似たり、又水勢は雷を震うが如く、百顆の玉砕けて千萬顆となり、水煙は雲霧となす』とたとえる。この流れは大井河